

第2話 若大将の60年代

■裕次郎と好対照の優等生

テレビの時代が決定的になった後に登場して一世を風靡した青春映画スターといえば、加山雄三（1937～）を措いていない。

松竹の看板スターとして『愛染かつら』三部作（38～39 野村浩将）で空前の大ヒットを飛ばした戦前の日本映画界を代表する人気美男俳優・上原謙を父親に、名子役として活躍した後、上原と結婚して引退するまで松竹の女優だった小桜葉子を母親に持つ加山は、デビュー時から「芸能界のサラブレッド」というキャッチフレーズで売り出される。母・小桜が明治の元勲岩倉具視の曾孫という華族出身の経歴も、話題性を高めた。

湘南のお坊ちゃま育ちで慶應義塾高校から慶應大学に進み、国体スキー神奈川県代表に選ばれるほどのスポーツマンだった高校、大学歴は、3歳年長の先輩であり、ヨット、バスケット、ボクシングに打ち込んだ石原裕次郎と全く同じである。大学卒業後、父・上原が当時専属していた東宝に招かれ、『男対男』（60 谷口千吉）でデビューを飾った。

ただし、キャラクターの方は裕次郎とは大きく違っていた。

慶應大学在学中に兄・慎太郎の芥川賞受賞作『太陽の季節』（56 古川卓己）映画化のためにスカウトされ、そのまま日活専属となって大学を中退した裕次郎は、高校時代から酒、麻雀、喧嘩などにも明け暮れ「太陽の季節」が広めた無軌道な若者風俗「太陽族」の典型でもあった。およそ優等生とは言えない青春時代である。

それに対し高校時代の加山は無遅刻、無欠席。東宝入社の際も、「普通のサラリーマンになって苦勞するより、趣味のスポーツや音楽を生かし、親の地盤が生かせる映画界が利口な就職先」と考えていたらしい。おおらかで率直な人柄は、五十年以上後の現在もTV番組「若大将のゆうゆう散歩」で遺憾なく発揮されている。

当然、そのキャラクターは役柄に反映された。デビュー作の犯罪アクション『男対男』では海運会社社長の遊び好きどら息子である。初主演作『独立愚連隊西へ』（60 岡本喜八）以降はアクションドラマのヒーローが続いたが、翌年公開の『大学の若大将』（61 杉江敏男）の主人公・田沼雄一こそ、加山のために作られた等身大のキャラクターだった。60年代を通じて大ヒットした『若大将』シリーズの誕生である。

■「若大将」シリーズの登場人物

雄一は、明治時代から続く老舗すきやき屋「田能久」の若旦那、つまり「若大将」だ。祖母りき（飯田蝶子）、店の主人である父・久太郎（有島一郎）、妹・照子（中真千子）の四人暮らしである。りきは典型的な明治の女で新しもの好きな活発おばあちゃん。久太郎

は保守的な大正生まれで商業学校出というのがコンプレックスになっており、雄一の精神的にも物質的にも豊かな大学生活に多少苦々しい思いを感じている。照子は家業を手伝いながら洋裁学校に通うしっかり者だ。

祖母役の飯田蝶子は大正末の松竹蒲田で大部屋俳優としてスタートを切り、戦前、戦中を通して欠かせない脇役という地位を占めてきた。戦後は小津、成瀬、黒澤といった巨匠の名作で印象的な助演を務めた大女優である。「ゆーいち」と孫の若大将を呼ぶ優しい声と、倅の久太郎を叱る厳しい声とのコントラストが絶妙で、この人の晩年最後の当たり役となった。

父親役の有島一郎はたしかに大正（5年）生まれ、軽演劇で活躍した後47年に映画界入りし喜劇の脇役として存在感を発揮していた。ペースを感じさせる小市民的役柄を得意とするが、『若大将』では老舗の跡取りとして自己主張もするやもめの中年男を好演した。たしか『リオ』だと思うが、折からの明治百年を誇る母に負けじと「何が明治百年だ、大正五十年バンザイ！」とやるあたり大正人の面目躍如だった。

妹役の中真千子は宝塚歌劇団出身で、退団後の60年に東宝入社した。『社長洋行記』（62 杉江敏男）など『社長』シリーズで森繁社長の娘役などでも活躍している。とはいえ彼女の代表作は、やはり『若大将』シリーズだろう。

雄一は「京南大学」の運動部に所属している。ここでも部のエースとして「若大将」ぶりを発揮する。同級生の石山（田中邦衛）は大企業社長のドラ息子で、恋愛をはじめ何かとライバルになる「青大将」。若大将の敵役となり時としてかなりあくどいこともやらかすが、根は小心者で憎めない。同じく同級生の江口（江原達怡）は、縁の下の力持ち的に若大将を支える部のマネージャーだ。

田中邦衛は実年齢では加山より5歳年長で、俳優座養成所在籍中に『純愛物語』（57 今井正）で映画初出演し、その後も俳優座劇団員として映画に出演していた。後に名プレイヤーとなる田中が一躍有名になったのはこの「青大将」役である。悪役になりかねないキャラクターをコミカルな愛嬌をこめて演じ、人気を博した。これをきっかけに、印象的な存在となりさまざまな作品に起用されるようになる。その特徴的な台詞回しは、後年物真似芸人のネタになるほどだった。

江原達怡は、加山と同じ「慶應ボーイ」（こういう呼称があったのも、大学生が選ばれた存在だった時代の表れだろう）で高校、大学と一年先輩に当たり大学時代から二人は顔なじみだった。江原は小学生の頃から子役で映画出演し、高校時代から東宝専属になっていて俳優としては大先輩である。やや陰のある二枚目風の脇役を得意としたが、『若大将』シリーズではコミカルな面をも披露して若大将をサポートする役割を果たした。

若大将の恋の相手は、アクション映画『東から来た男』（61 井上梅次）でも加山の相手役を務めた星由里子が演じる澄子さんである。二人は知り合うと同時に惹かれ合うのだが、いつも途中で若大将の周囲に美女が現れ、誤解から澄子さんの怒りを買う。そのわだかま

りを抱えつつ若大将は大学対抗戦の相手「西北大学」との試合に勝利し、誤解がとけ機嫌を直してくれた澄子さんと仲直りしてハッピーエンドとなる。

星由里子は、50年代に東宝が行っていた新人コンテスト「シンデレラ娘」の58年度優勝者として高校在学中の15歳でデビューした。ちなみに、このコンテストは84年に東宝「シンデレラ」オーディションとして復活し沢口靖子、長澤まさみなどを世に出している。60年に同世代でほぼ同期の浜美枝、田村奈巳と「スリーペット」として売り出され、同年の製作者協会新人賞を受賞した。

実年齢17歳の星が演じる澄子さんは、最初はキャンディストアの売り子（『大学』）だったり洋裁店のお針子（『銀座』）、スポーツ用品店の店員（『日本一』）だったりする。だが、星が二十代になるにつれどうしても学生の年齢でいなければならない若大将との設定上の年齢差が縮まり、二人の恋の力関係も澄子さんの方が若大将を振り回し気味になってくるのがご愛敬だ。

シリーズには、澄子さんの心をかき乱す存在として、若大将をめぐるさまざまな美女が登場する。若大将の気持は澄子さんひとすじであるにもかかわらず、その回りには女性たちが次々と寄ってくる。もちろん、男性中心の当時の感覚からいえば作品のお彩り的な意味合いもあったのだろう。

当初は、星由里子と共に売り出し中の団令子（『大学』『銀座』）、田村奈巳（『日本一』）が起用された。その後海外ロケが主流になると、『ハワイ』や『レッツゴー！』の香港では現地の女優が澄子さんに若大将との仲を誤解させる役を演じ、それが難しい『アルプス』では在日外国人タレントのイーデス・ハンソンがその役目を果たした。『南太平洋』ではミュージカル女優の前田美波里、『ゴー！ゴー！』では舞台女優の浜木綿子、『リオ』では歌手の中尾ミエと新味ある顔合わせもあった。

彩りとしては、新人女優の顔見世的な役割もあった。藤山陽子、沢井桂子、松本めぐみなどデビューしたばかりの新人が入れ替わり立ち替わり姿を見せている。後に日活ロマンポルノで大活躍する中川梨絵もその一人だ。『エレキ』が映画デビュー作となった松本めぐみは、その5年後の70年、加山雄三と結婚することになる。

……と、以上が『若大将』シリーズの基本構造とシリーズを支えた顔ぶれである。

■ 脚本・田波靖男の新しい感覚

東宝の大プロデューサーである藤本真澄（1910～79）は、加山雄三をスターダムにのし上がらせるため、彼のためのオリジナル企画を作ろうとした。その際に下敷きにされたのが、戦前の松竹蒲田のヒット作『大学の若旦那』（33 清水宏）だと言われる。主演した藤井貢は慶應大学卒業で大学時代ラグビーの日本代表選手になった加山の大先輩だ。好評を博しシリーズ化され、36年までの間に数本が製作された。ちなみにその一作、早稲田大学卒の近衛敏明主演『若旦那・春爛漫』（35 清水宏）は、立教大学を出て松竹に入社したば

かりの上原謙のデビュー作である。

藤本プロデューサー自身が上原より1歳年下で慶應大学を出ており、この『大学の若旦那』シリーズとは同世代の映画青年だった。戦後東宝を支える存在のひとりとなった藤本は、久保明、宝田明で『大学の侍たち』(57 青柳信雄)、『大学の人気者』(58 松林宗恵)、『大学の28人衆』(59 青柳信雄)の大学シリーズを企画し、瀬木俊一の『若旦那は三代目』(58 中村積)、『若旦那大いに頑張る』(59 中村積)が続いたが、いまひとつ大きなヒットにはつながっていなかった。

その路線に再チャレンジしたのが『大学の若大将』なのである。藤本が脚本家に抜擢したのが、田波靖男(1933~2000)だった。田波は57年に慶應大学を卒業し東宝入社。助監督志望だったにもかかわらず企画助手としてプロデューサーを助ける文芸部に配属になり、藤本の下につく。

当時の藤本製作による大ヒット作としては森繁久彌の『社長』シリーズ(56~70)があり、年2本のペースで量産されていた。『へそくり社長』(56 千葉泰樹)に始まり、『続・社長学ABC』(70 松林宗恵)まで15年間で33本を数える。小心者のくせに浮気症の森繁社長と「ブワットと行きましょう！」が口癖の接待や宴会が大好きな平部長が、小林桂樹演じる真面目な秘書を挟んで丁々発止のサラリーマン劇を展開する。

脚本は、戦前から日活、新興キネマ、大映などで活躍してきた笠原良三(1912~2002)が担当していた。『大学の若大将』を構想するに当たり、藤本は若い田波を笠原の弟子的な立場で共同脚本に起用した。32年に日本大学芸術学部を中退して映画の世界へ入った笠原はその頃50歳近い。20代後半でつい4、5年前まで大学生だった田波を加えることで、新しい世代の感覚を流入させようとしたのである。

若大将たち水泳部のメンバーが、部室で田能久からくすねてきた肉を焼くシーンで大学内の浄化槽の鉄蓋を鉄板代わりに使ってしまうアイデアなどは、田波の斬新な感覚だった。他にも、カンニング事件やアルバイトにまつわる騒動など、学生生活のディテールが押さえられている。5作目『海の若大将』(65 古澤憲吾)からは田波単独の脚本になった。

しかも田波は加山やマネージャー役の江原達怡(59年卒)の慶應大学での先輩に当たる。同じ学生気分で、大学生たちの等身大の姿を描くにはうってつけだった。さらに藤本は、加山の生育歴を徹底的に調べ上げたという。高校時代に巨大な弁当を持参したとされる旺盛な食欲を、「腹減ったあ！」と陽気に訴えるところに、お婆ちゃんっ子だったのを飯田蝶子の祖母との掛け合いに生かした。そうやって若大将・田沼雄一=加山雄三というキャラクターに造形したことで、いっそう等身大の感じを強めたのである。

■作品ごとに違うスポーツが描かれる

『大学の侍たち』でも舞台となった大学水泳部は、50年代から60年代にかけてスポーツ界の花形部門のひとつだった。高校時代に56年のメルボルン五輪で自由形銀メダルを2

個獲得した早稲田大学の山中毅（1939～）は、60年のローマ五輪でも銀メダル2個に輝き、オーストラリアのマレー・ローズ選手とのライバル対決で日本中を湧かせた。幼いわたしたちは、「山中がんばれ！」と国際試合を中継するラジオに声援を送ったものだ。

水泳だけではない。大学野球の人気も、高校やプロに負けないものがあった。テレビ草創期、普及期にはNHKだけでなく民放各局も東京六大学の試合を頻繁に実況中継していた。立教の長嶋、杉浦、本屋敷、法政の小坂、早稲田の徳武などのスター選手が活躍していた50年代後半にはプロ野球以上の数の観客を球場に集めていたという。慶應の「若き血」、早稲田の「紺碧の空」、明治の「紫紺の歌」などの応援歌を、小学生までもが諳んじていた時代である。

若大将たちの在学する「京南大学」は慶應、ライバルの「西北大学」は早稲田を擬しているというのは誰にでもわかった。六大学野球をはじめ、あらゆる競技で「早慶戦」は花形カードであり、それは社会全体に通用するものだったのである。

水泳、野球に限らず、明治以来日本におけるスポーツの導入に当たっては大学が大きな役割を果たした。大学運動部は、スポーツ界の主軸だったのである。『若大将』シリーズは、作品ごとに違う運動部を取り上げて観客の興味を惹いた。

『銀座の若大将』（62 杉江敏男）は拳闘部。ファイティング原田、海老原博幸などが人気を集めテレビでは毎日のように試合中継が放送された。大学でもローマ五輪銅メダルの田辺清、東京五輪金メダルの桜井孝雄を擁する中央大学拳闘部が名高かった。この作品では万座スキー場でロケが行われ、加山のスキーの腕前も披露される。

『日本一の若大将』（62 福田純）はマラソン部。途中で水上スキーの場面が出てくるのは、マリンスポーツが大好きな加山の躍動する姿を見せるためだったのだろう。『ハワイの若大将』（63 福田純）はヨット部、『海の若大将』（65 年古澤憲吾）は再び水泳部で、同時に現実の加山の持ち船であるヨット「光進丸」を使った航海が描かれるなど、海がらみの話が続く。

■主題歌も大ヒット、東宝の稼ぎ頭に

『エレキの若大将』（65 岩内克己）はアメラグ部、『アルプスの若大将』（66 古沢憲吾）はスキー部とその頃の庶民には縁遠い種類のスポーツが登場する。この時期の加山は、歌手として脚光を浴びるようになっていた。元々『大学』のときから主題歌が作られそれを歌っていたのだが、音楽にこだわりを持つ加山は「弾厚作」（敬愛する作曲家、團伊玖磨と山田耕筰から取ったペンネーム）の名で自ら作曲、ときには作詞をも手がけるようになる。

その曲がヒットし、『海』では「恋は紅いバラ」が歌われ、『エレキ』での「君といつまでも」は350万枚のミリオンセラーとなって66年末の紅白歌合戦出場を果たす。空前のエレキギターブームのさなかに作られたこの映画では、テレビ番組の「エレキ合戦」に参加して優勝するのがアメラグそっちのけのクライマックスとなっている。

『アルプス』で披露された「蒼い星くず」も大ヒットするなど若大将人気は全盛を誇り、シリーズ最高の興行収入を記録した。『アルプス』と谷啓主演の『クレージーだよ 奇想天外』(66 坪島孝)との2本立て番組は、この年東宝の稼ぎ頭にもなった。「君といつまでも」の歌詞の間の台詞「ほかぁ幸せだなあ」は、人気絶頂の加山自身の偽らざる心境に聞こえもした。

この勢いに乗った『歌う若大将』(66 長野卓)は、シリーズの名場面を交えながら日本劇場を超満員にした「加山雄三ショー」の記録映像やタヒチで海を楽しむプライベート映像を編集した特別版である。こういうものが成り立つほど、歌う「若大将」人気は絶大なものがあつた。

■モータリゼーションの流れも採り入れる

第一作が7月、第二作が翌年2月、第三作が7月と、とりたてて特別とはいえない時期に公開されていたシリーズは、『ハワイ』が特撮映画『マタンゴ』(63 本多猪四郎)との2本立てで8月のお盆映画として登場したあたりから、東宝映画全体の中で軸を占める存在となっていた。

そして『レッツゴー！若大将』(66 岩内克己)は67年のお正月映画として社長シリーズ『社長千一夜』(66 松林宗恵)との2本立てとなった。「まだ見ぬ恋人」「夜空を仰いで」「旅人よ」とヒット曲が流れ、若大将はサッカー部のエースだ。東京五輪準々決勝敗退からメキシコ五輪銅メダルへと、最初のサッカーブームが巻き起こっていた。わたしの通う中学校で、サッカー部は一番の人気だった。

大学2年で日本代表となり東京五輪に出場し、後にメキシコ銅メダルの立役者となった早稲田大学の釜本邦茂というスターが誕生してサッカーは一気に陽の目を浴びる。スポーツと縁のない中学生のわたしでさえ、釜本だけでなく日本代表メンバー全員の顔と名前が一致するほどだった。映画の中で全日本選抜の代表に選ばれ海外遠征する若大将と釜本のイメージが重なる。

『南太平洋の若大将』(67 古澤憲吾)は柔道部である。言うまでもなく柔道は日本発祥のスポーツだが、東京五輪で正式種目に取り入れられ金メダルを量産したことにより、それまでの汗臭く垢抜けしないイメージから、一気に国際スポーツとして注目されることになる。メキシコこそ五輪種目から外れたものの、ミュンヘン以降常にオリンピックで日本中の耳目を集める競技となった。ちなみに歌の方は「君のために」だけで少々淋しい。

『ゴー！ゴー！若大将』(67 岩内克己)は、植木等主演の日本一シリーズ『日本一の男の中の男』(67 古澤憲吾)との組み合わせで68年のお正月映画となった。題名は60年代に流行したダンス「ゴーゴー」からの命名だろうか。陸上競技部で駅伝大会がメインの話だ。若大将は自動車部にも助っ人に借り出され、鈴鹿サーキットでの全日本学生ラリーにレーサーとして出場する。歌われるのは「別れたあの人」「幻のアマリリア」。

この時期、日本はクルマ社会への道を急激に歩み始めていた。内閣府の消費動向調査によれば、乗用車の世帯普及率（1台でも所有している世帯の比率）は調査を始めた61年にはわずか2.8%に過ぎなかった。それが60年代半ばには10%を突破し、67年以降一気に普及が進む。67年に10%だったものが7年後の74年には40%と4倍の伸びを示している。推移のグラフを見ても、この時期の右肩上がりぶりは急角度だ。母が免許を取ってわが家に軽自動車 came のも67年頃だったと記憶する。

運転免許取得者数は、67年に約2470万人だったのが73年に3000万人を突破し、74年には約3214万人と全人口の3割以上に達していた。

道路の方も東京五輪をきっかけに首都高速が整備され、65年には名神高速道路、69年には東名高速道路が全線開通して東京と大阪を結んだ。鈴鹿サーキットは62年に開業し、日本でも本格的な自動車レースが行われるようになるなど、若者文化としても自動車は欠かせないものになる。71年には、65年前後には自動車に比べ3倍近い普及率だったオートバイ、スクーターの二輪車を抜き、最もポピュラーな長距離移動手段となる。大学に自動車部ができるのは、そうした流れの中のことだった。

■ ザ・ランチャーズとザ・ワイルドワンズ

『リオの若大将』（68 岩内克己）での若大将は、マイナー競技のフェンシング部に所属する。それを補うのがサーフィンだ。加山雄三の出身地である湘南は、駐留軍の米兵が持ち込んだといわれるサーフィンを日本で最も早く普及させた海岸である。60年代後半には流行が始まり、66年に第1回全日本サーフィン大会が開かれる。68年には若者に人気の週刊誌「平凡パンチ」が「はやりはじめた豪快な海のスポーツ サーフィン」との特集記事を掲載している。披露される加山のヒット曲は「ある日渚に」。

また、実際にも加山がバックアップしていた新進グループサウンズのザ・ランチャーズが若大将に率いられるバンドとして出演し、若大将、青大将と共に「大学バンド合戦」に出場する。前作『ゴー！ゴー！』で少しだけ登場していたのが、今度はメンバーがひとりひとり出演者扱いされる抜擢ぶりだった。

ザ・ランチャーズは62年に加山が俳優仲間と結成したバンドだったが一旦解散し、64年に従弟の喜多島兄弟らと再結成。その後「君といつまでも」の大ヒットなど加山がソロで大活躍するのに伴い、67年に加山抜きで第三期の新メンバーとなり「真冬の帰り道」というスマッシュヒットを飛ばした。喜多嶋瑛、喜多嶋修、大矢茂、渡辺有三の4人のメンバーは全員慶應大学の学生で、映画の中の「京南大学」バンドと照応していた。

『リオ』の併映作は、前年夏の『南太平洋』が舟木一夫、内藤洋子の『その人は昔』（67 松山善三）との2本立てだったのに続き内藤洋子の単独主演作『年ごろ』（68 出目昌伸）だった。その内藤洋子と70年に結婚するのがザ・ランチャーズの喜多嶋修なのである。二人の間の娘・喜多嶋舞も女優になった。

また、大矢茂が「二代目若大将」として売り出されることになるのは、後に詳しく述べたい。

加山は他にも慶應大学の後輩である加瀬邦彦が結成したグループサウンズ「ザ・ワイルドワウンズ」の命名者となりバックアップするなど、グループサウンズと親和性の高い音楽活動を行った。ザ・ワイルドワウンズは『レッツゴー!』にバンド役で出演している。また、『エレキ』のように彼自身がエレキギターを演奏したし、『海』から『アルプス』までは「寺内タケシとブルージーンズ」がエレキ演奏を行った。なお、『エレキ』には当時ブルージーンズに加わっていた内田裕也も出演している。

60年代後半の若者の関心は、スポーツと並んで音楽だった。アメリカの人気バンド「ザ・ベンチャーズ」が火をつけたエレキギターブームは、65年1月にこのバンドが来日したあたりで最高潮に達し、「サトウ勝ち抜きエレキ合戦」（フジテレビ系）というテレビ番組まで登場した。一部の教育委員会による小中学生への「エレキ禁止令」を皮切りに全国的に「エレキギター追放運動」が巻き起こる。

『青春デンデケデケデケ』（92 大林宣彦）は、65年の香川県の高校を舞台にエレキに魅せられた少年たちのバンド活動を描いている。わたしが中学高校時代を送った鹿児島は、おそらく最もそういったことに厳しい土地柄だったから、同級生にもエレキギターを操る者はほとんどいなかった。しかしその鹿児島でも、エレキをはじめとするポップ・ミュージックに対する音楽熱は高く、中でもビートルズは崇拝されていた。

66年のビートルズ来日公演は、その種の音楽に全く興味のなかった中学2年生のわたしにまで社会現象として印象深い。通っていた学校は中高一貫の男子校だったので、高校生の先輩たちが廊下でビートルズをロズさんでいる姿をよく見た。中学生のわたしたちの関心は、まだ幼くて「歌謡御三家」をはじめとする歌謡曲にあり、加山雄三の曲に触れることで新しいものを感じ興奮する程度だった。

■イケてる同級生・池畑慎之介

シリーズが始まった頃は小学3年生だったわれわれの中学時代、多くの同級生が加山雄三ファンであり、『若大将』シリーズに憧れた。学校のある鹿児島は日本一生徒指導の厳しい地域（制服常時着用が義務づけられ、中学生、高校生の男子は全員丸刈り）であり、中学生は生徒補導団体が特別に認める作品（つまり教育的映画）以外は親同伴でない限り観覧禁止だった。発覚すると学校側から処分される羽目となる。

65年、中学1年のときに日本公開された『サウンド・オブ・ミュージック』（65 ロバート・ワイズ）を観に行った同級生が大量に嚴重説諭処分され、われわれは早々に鹿児島の生徒指導の掟の厳しさを実感する。でも、ある者は親に頼んで同行してもらい、鹿児島ラサールという学校は県外からも多数入学者があったのでそうした者は長期休暇の帰省時に地元で、『若大将』を観ていた。わたしが初めて観たのは中学3年の夏休み、福岡市の祖

父母のところへ行って滞在する間に中洲にあった福岡東宝劇場での『南太平洋』である。

なにしろこちらは丸坊主に詰め襟の学生服、家でも学校でも規制だらけの中学生である。男子校で女子との付き合いもない。鹿児島ラサールには女性教師はおらず、男性教師と運営するカソリック教団の男性修道士たちの世界だった。わたしをはじめ大多数の生徒はスポーツにも音楽にも大した才能はなく、女の子にもてる自信もない。受験勉強に駆り立てられる中学生生活を、大方は鬱々とした気分を送っていた。

そんな田舎の中学生男子にとって、『若大将』の世界がいかに眩しく見えたかは言うまでもないだろう。東京と聞くだけで遠い存在なのにハワイやアルプスやタヒチやリオを飛び回り、スポーツ万能で音楽の才能もあり澄子さんをはじめ多くの女性に好かれる人気者。それは、今で言う「中二病」の背伸びやら妄想やら粋がりやらからの憧れの対象にぴったり嵌っていたのだろう。

ピーターこと池畑慎之介は、わたしの仲のいい同級生だった。特に中2の頃は、文芸部に所属して彼は詩を、わたしは拙い小説や文芸評論を書く仲間として、また、演劇部を作って芝居をやろうと画策する演劇に憧れる少年として、しょっちゅう幼い議論を闘わせていたものだ。その池畑が、学校の中で誰よりも熱烈な加山雄三ファンなのだった。

もちろん彼は、わたしのような「イケてない」ヤツとは明らかに別だった。なにしろ、その3年後にはピーターの名で映画『薔薇の葬列』(69 松本俊夫)に主演して俳優デビュー、歌手としてのデビュー曲「夜と朝のあいだに」で69年度日本レコード大賞新人賞に輝くことから、どだい持っているものの桁が違う。文化祭のクラス対抗演劇で女装すると皆が息を呑むような美形だったし、その上、演技もうまければ歌も上手なのである。

池畑の家に行くと、加山雄三のポスターが貼ってあり、まだ映画少年にはなっていなかったわたしが見たこともない「東宝映画友の会」の機関誌「東宝映画」が揃えられていた。中学生の映画館単独入場厳禁など承知の上、確信犯で映画館通いをしていたわけだ。冬、夜通し徒歩で長距離を歩く「夜間行軍」なる学校行事で池畑と集団から大きく後れて二人一緒に歩いたのだが、話に飽きたら彼の歌う加山雄三メドレーになる。その年流行った「蒼い星くず」「お嫁においで」「霧雨の舗道」「夜空を仰いで」……。

■所得倍増計画と高度経済成長

もちろん、『若大将』シリーズは田舎の中学生相手に作られていたわけではない。主たる観客対象はあくまで全国の若者だった。そして、60年代という時代の若者の気分マッチしたからこそ、大ヒットシリーズとなったのである。

第一作が出た61年は、池田勇人内閣が前年閣議決定した「国民所得倍増計画」のスタートした年である。この政策は、61年度から70年度までの10年間で国民所得を倍増させる、そのために10年間毎年の経済成長率を平均7.2%とするものだった。同時に池田は、社会保障の充実、1000億円の減税を約束し、就任後初めて行われた60年11月の衆議院

選挙で勝利を収める。

「国民所得」とは国民全体の所得の総額であり、国民総生産に補助金を加え、そこから間接税、固定資産の消耗分を控除したものであるというのが厳密な定義だが、池田首相は「給料を2倍にします」というわかりやすい説明で国民の納得を得た。衆議院選挙における自民党のテレビCMで画面に向かい「わたしは嘘は申しません」と確約する姿は、小学2年生のわたしから見ても頼もしかったのをよく憶えている。

この言葉は、今なら確実に「流行語大賞」になっている。61年4月には新東宝で『私は嘘は申しません』（61 斉藤寅次郎）という松原緑郎演じる「生田隼人」というペテン師が主人公の喜劇映画が公開されているほどだ。池田首相は、61年アメリカ、東南アジアを歴訪、62年にはヨーロッパ7カ国を訪れて経済外交を積極的に展開した。フランスのド・ゴール大統領から日本の首相は「トランジスタラジオのセールスマン」と揶揄されたのはこのときである。

なりふり構わぬ池田の経済外交や国内での経済成長により、64年にはOECDに加盟が認められ、続いてIMFの8条国（国際収支上の理由による為替制限ができない国＝経済先進国）の地位を得る。東京オリンピックに先立ち9月にはIMF総会が東京で開催され、日本が世界の先進国の仲間に入ったことが内外に向かって示された。10月のオリンピックの大成功は、そのことをさらに明確に印象づける。

経済成長は飛躍的に進み、目標年次の70年度より3年も早く、わずか7年間で67年度には国民所得倍増を果たす。60年度に1万3100円だった大卒初任給は、2万5600円になったから、「給料を2倍」も嘘とは言えなかった。

この7年間で、現在につながる日本社会の基本的な形が出来上がっていく。60年代前半は団地ブームが起き「三種の神器」と称されたテレビ、洗濯機、冷蔵庫の家電製品が普及してそれまでの純日本風ではない新しい生活スタイルが広がる。61年には、国民皆保険、国民皆年金という現在の医療保険制度、年金制度が実現する。同年は国内線ジェット旅客機の就航、NHK朝の連続テレビ小説（現在の「朝ドラ」）開始があった。

62年には世界一の巨大タンカー日章丸が就航し、中東からの石油輸入が本格化する。参議院選挙の全国区でタレント候補藤原あきがトップ当選し、タレント議員が出現したのもこの年である。俳優でも歌手でもない資生堂美容部長という馴染みのない職業だったにもかかわらず、NHKテレビの人気クイズ番組「私の秘密」のレギュラーだった彼女のことは小学生のわたしでも知っていた。マスコミが政治的知名度を作り出したはしりである。

63年は日米間の初のテレビ衛星中継が行われた。国産初のテレビアニメ「鉄腕アトム」が放送開始。毎週土曜日の夜は、日本中の子どもがテレビにかじりついた。また、黒部第四ダムが完成し巨大水力発電時代が到来する。電化製品ではラジカセが発売される。両親が共稼ぎの家庭が増え、家の鍵を持たされる「カギっ子」が流行語となった。母が外出がちだったわたしは、既に59年の小学校入学と同時にカギっ子だった。この年、年末の紅

白歌合戦は81.4%という史上最高視聴率を記録し、フィナーレでは「東京五輪音頭」が出場歌手により高らかに合唱された。

そしてオリンピックの年64年は、東海道新幹線、東京モノレールが開業。東京は土木工事だらけで道路が拡張され、高速道路が立体交差の姿を見せ、戦前からの銀座線だけだった地下鉄は62年の丸ノ内線に続き、日比谷線が全面開通、東西線が開業した。世界へ向けて、日本が戦後復興を果たした姿を見せつけた。小学6年生のわたしは1年生のときに開催決定したオリンピックを待ち望み続け、大多数の同世代と同様に競技観戦に熱狂した。

オリンピック後も発展は続く。道路は舗装され、都市ではビル建設が進んだ。65年はプロ野球のドラフト制導入。66年には家庭用電子レンジが登場した。67年はミニスカートが大流行、人口が1億人を突破する。ダイエー、西友、岡田屋（現・イオン）などが日本チェーンストア協会を設立し新しい流通の形が出来上がりつつあった。68年には36階建ての霞ヶ関ビルが完成し、超高層ビルの時代が始まる。

『若大将』シリーズの中でも、若大将は常に大学生だったが、澄子さんの方は働く女性として毎回さまざまな職業に従事する形で登場した。初期は製菓会社の「キャンディーガール」（『大学』）、洋装店のお針子（『銀座』）、運動具店店員（『日本一』）といった仕事だったが、徐々に繁栄する社会の中での花形職種へと変わっていく。

化粧品会社の宣伝課社員（『ハワイ』）、50年代末に1号店を出した西友、ダイエー、イトーヨーカドーなどがチェーンを拡大し脚光を浴びていたスーパーのレジ（『海』）、音楽ブームの楽器店（『エレキ』）、当時世界最大の航空会社だった米国パンアメリカン航空のローマ事務所員（『アルプス』）、一流宝石店社員（『レッツゴー！』）、スチュワーデス（『南太平洋』）、急速に箇所数が増え単なる燃料供給だけでなくサービスステーション化しつつあった新しいタイプのガソリンスタンド職員（『ゴー！ゴー！』）、観光会社営業部員（『リオ』）と、経済成長の中で生まれてきた若い女性憧れの仕事を作中で見せるサービスにもなっていた。

企業とのタイアップが常態化したのも大きな特徴である。澄子さんが製菓会社の宣伝のため働く『大学』で明治製菓と提携したのをはじめ、富士フィルム、石川島播磨重工、東レ、東芝、日産自動車などの大企業と組んで最新の製品を披露することで消費を煽る効果をも生んでいた。

■若者の憧れは東京

『若大将』シリーズが人気を呼んだ61年から68年の時期は、日本が高度経済成長を果たして先進国の仲間入りをするとともに、われわれの今日の生活の形が整う過程でもあったのである。『若大将』は、豊かになり便利になる時代の明るさの象徴だったと言える。若い観客たちは若大将や青大将の繰り広げる陽気でにぎやかな騒動を、自分たちが享受す

る豊かさの実感と重ね合わせて楽しんでいたのだろう。

49年に新制大学が発足し、評論家の大宅壮一から「駅弁大学」との有難くない命名を授かりながら、それでも全国各地に大学が増えていった。55年には大学進学率が7.9%、男子だけに限定すると7.9%に達している。その後10%弱で横這いだった進学率が急上昇に転じるのは60年頃からだ。経済成長で豊かになっていくことが、大学進学の可能性を広げた。

63年には同世代の大学進学者数が20万人を突破し、64年には進学率も15%を超える。65年、66年には団塊の世代のベビーブームで同年齢人口が急増し250万人以上となっていたために母数が大きくて進学率は下降したものの、進学者数は増え続け、66年には30万人に達した。その後は進学者数、進学率ともに上昇する一方だった。

大学生の生活や風俗は、若者文化の最先端を走るだけの勢いを持っていた。60年の岸信介内閣による日米安保条約改定では多くの学生が反対運動に参加し政治的活動に走ったが、それが過ぎるとスポーツや音楽、ファッションといった消費行動に積極的になる。64年にはファッションなど各種消費情報を満載した週刊誌「平凡パンチ」が創刊され、66年には発行部数100万部を突破した。同年には「週刊プレイボーイ」が創刊されて競い合うようになる。『若大将』シリーズは、この流れにも通じるものを持っていた。

そうした若者消費文化の中心は、なんとといっても東京である。あらゆる情報、あらゆる豊かさが東京に一極集中していた。今日でも東京と地方との格差が指摘されているが、高度経済成長時代の格差はもっと甚だしかったのである。東京には新しいものが次々と生まれ富が集まる一方で、地方は成長の恩恵に浴するにはまだ程遠かった。

東京では60年代初めから下水道整備が急速に進められ水洗便所が広まっていったのに対し、地方では汲み取り式がほとんどだった。東京五輪の頃、東京から鹿児島へ転校してきた同級生から、電車のドアは自動的に開閉するものと思い込んでいたらこっちは手で開けないといけないんだねと呆れ顔で言われたのを記憶している。

鹿児島では、新聞でプロ野球ナイターの結果を知ることができるのは翌日の朝刊でなく夕刊だったし、週刊誌は2、3日遅れて、月刊誌となると数日遅れの発売だった。64年には、東京ではNHK、NHK教育の他、日本テレビ、TBS、NET（現・テレビ朝日）、フジ、東京12チャンネル（現・テレビ東京）と現在のキー局が既に全部揃っていたが、鹿児島ではNHK以外は民放1局が存在するだけだった。「シャボン玉ホリデー」（61～）、「夜のヒットスタジオ」（68～）など評判の人気番組が観られないもどかしさを味わわなければならない。

若者にとって東京は文化的な憧れの的だった。その「憧れの東京」へ、就職、進学で大量の若者が流入していく。終戦の45年には大正前期とほぼ同じ約350万人にまで激減していた東京の人口は、50年代前半には戦前の水準（40年735万人）に復し、60年には968万人に達していた。埼玉、千葉、神奈川など首都圏郊外のベッドタウン化が進む67

年に増加がストップするまで 1000 万人を超える大都市に膨れあがった。

『ALLWAYS 三丁目の夕日』(05 山崎貴)にも取り上げられた就職列車による中学卒業生の集団就職は 55 年頃から始まり、団塊世代が中学を卒業する 63~66 年に最盛期を迎える。さらにその 3 年後の 66~68 年には大量の大学進学者が東京を目指すようになる。『若大将』シリーズには、憧れの東京、憧れの大学生活という二つの夢の要素が詰まっていた。

■海外旅行が珍しかった時代

また、若い観客たちに海外へ目を向けさせたことも大きい。63 年 8 月のお盆興行に航海された『ハワイ』は、題名通りハワイロケが行われ、ワイキキビーチなどで若大将たちがマリンスポーツを楽しむ様子が描かれた。若い観客にとっては海外でのバカンスなど戦争中はもちろんのこと、戦後になっても日本人の海外渡航は政府によって厳しく制限されていた。焼け野原となった日本は旅行者に外貨を持ち出させる余裕もなかったのである。

外国への旅行は、業務、視察、留学などごく限られた特定の目的が認められない限り許可されなかった。62 年の海外旅行者数は約 7 万 4800 人と、現在の 1850 万人 (2012 年)のわずか 0.4%に過ぎない。

61 年にはサントリーが「トリスを飲んで、ハワイに行こう!!」との有名なコピーによる CM を打ち話題を呼んだが、これとて、当選者にハワイ旅行の旅費となる積立預金証書を贈呈するという形でしか行えなかった。当選者の多くは、証書を旅行には使わず換金するしかなかったという。

ようやく 63 年 4 月には現金とトラベラーズチェックによる年間総額外貨 500 ドル以内の持ち出しが可能になり仕事の都合などによる渡航が一般化されたものの、旅行代理店経由で政府の認可が必要だった。庶民が自由に海外へ観光旅行に行けるようになるのは、さらに 1 年後の 64 年 4 月からである。同年 3 月に IMF の 8 条国となり円が世界中で交換可能な通貨と認められたことで、観光目的の渡航が 1 人年 1 回 500 ドルまでの外貨持ち出し制限付きで自由化された。

65 年には、その頃は唯一の海外便を運航する国内航空会社だった日本航空が初の海外パック旅行商品「ジャルパック」を発売する。63 年に 10 万人を突破した旅行者数が急上昇するのはこのあたりからで、『リオ』が公開された 68 年には 34 万人に達していた。

『若大将』シリーズより前には、同じく東宝のドル箱シリーズである社長シリーズが『社長洋行記』『続・社長洋行記』(62 杉江敏男)で香港ロケ、『社長外遊記』『続・社長外遊記』(63 松林宗恵)でハワイロケを行っていた。しかしこれはオジサンたちの海外遊興ツアーであり、若者の憧れの対象にはならない。やはり、若大将や青大将が恋にマリンスポーツに音楽にと活躍しなければ、若い観客の胸を躍らせることにはならない。

というので『若大将』シリーズでは海外ロケが頻繁に行われるようになる。『エレキ』『海』

は人気絶頂の加山のスケジュールが取れずに国内ロケだったが、66年の『アルプス』はスイスのアルプスだけでなくウィーン、パリと豪華ヨーロッパロケが繰り広げられた。56年のイタリア、コルティナダンペッツォ冬季五輪でアルペンスキー3冠に輝き美男ぶりを買われ映画スターに転身したトニー・ザイラーが特別出演するなど、話の方もスケールが大きい。

海外ロケに関しては、世界最大手のパン・アメリカン航空との提携が『ハワイ』から始まっていた。『アルプス』では澄子さんが社員として活躍するだけでなく、当時大相撲千秋楽の優勝力士に同社からの賞を授与する際の「ヒョーショージョー！」で始まる日本語による読み上げで人気者だったデビット・ジョーンズ極東地区支配人が彼女の上司役で顔を出すなど、日本・欧州路線を売り出すために全面的に協力している。

『レッツゴー!』は香港、マカオ。『南太平洋』はハワイ、タヒチ。『リオ』はブラジルのリオデジャネイロと、その都度目先を変えながら海外旅行熱をくすぐった。タヒチやリオはほとんどの日本人にとって馴染みがなく、海外の風物を見るだけでも楽しめるものだったろう。

■30代に突入、そして大団円……

このように、61年から68年までの『若大将』シリーズは、同時期において高度経済成長を遂げた日本社会の大変化と歩みを共にヒットを重ねていった。60年代を代表する青春映画シリーズと言ってもいいだろう。

ただ、68年には加山は31歳。他では『日本のいちばん長い日』(67岡本喜八)『乱れ雲』(67成瀬巳喜男)『連合艦隊司令長官 山本五十六』(68丸山誠治)、主演作でも『さらばモスクワ愚連隊』(68堀川弘通)『狙撃』(68森谷司郎)などで年相応の役を演じていた。大学生役という限定のある若大将役は、どう見ても年齢的に無理が生じてきていた。

『リオの若大将』では、結末部分で若大将たちの大学卒業が扱われる。かねてから志望していた造船会社から合格通知をもらったことに対し、父・久太郎は家業を継げと怒る。祖母りきの取りなしで就職を許された若大将の代わりに、親友であるマネージャーの江口が以前から愛し合っていた妹・照子と結婚し婿養子になって夫婦で店を支えていくことで話は丸く収まった。『若大将』シリーズ大学篇、めでたく大団円である。

ここから社会人篇へと移っていくのだが、それは次代の東宝青春映画という趣を持つので、その項で触れることとしたい。